

良寛覚え書

著者	永井 行蔵
雑誌名	日本歯科大学紀要．一般教育系
巻	4
ページ	85-105
発行年	1975-03-25
URL	http://doi.org/10.14983/00000117



良 寛 覚 え 書

新潟歯学部 永 井 行 蔵

Kōzō NAGAI: A Memorandum on Ryōkwan

(1974年11月12日 受理)

良寛覚え書

I 良寛の辞世

昭和43年(1968), ノーベル文学賞をはじめて日本にもたらした川端康成は, ストックホルムの国立アカデミーにおける受賞記念講演で, “美しい日本の私” と題して, 道元禅師の

春は花夏ほととぎす秋は月 冬雪さえて冷しかりけり

という歌を冒頭に掲げて, 日本の美の伝統を説いた。この歌に関連して, 彼は良寛の辞世ほか数首の歌を紹介しつつ, 自然に帰一する日本古来の心情を代弁せしめて, 次のように述べている。

この道元の歌も四季の美の歌で, 古来の日本人が春, 夏, 秋, 冬に, 第一に愛でる自然の景物の代表を, ただ四つ無造作にならべただけの, 月並み, 常套, 平凡, この上ないと思へば思へ, 歌になってゐない歌と言へば言へます。しかし別の古人の似た歌の一つ, 僧良寛(1758年—1831年)の辞世,

形見とて何か残さん春は花 山ほととぎす秋はもみぢ葉

これも道元の歌と同じやうに, ありきたりの事柄とありふれた言葉を, ためらひもなく, と言ふよりも, ことさらもとめて, 重ねて重ねるうちに, 日本の真髄を伝へたのであります。まして, 良寛の歌は辞世です。

霞立つ永き春日を子供らと 手毬つきつつこの日暮らしつ

風は清し月はさやけしいざ共に 踊り明かさむ老いの名残に

世の中にまじらぬとはあらねども ひとり遊びぞ我はまされる

これらの歌のやうな心と暮らし、草の庵に住み、粗衣をまとひ、野道をさまよひ歩いては、子供と遊び、農夫と語り、信教と文学との深さを、むづかしい話にはしないで、「和顔愛語」の無垢な言行とし、しかも、詩歌と書風と共に、江戸後期、18世紀の終りから19世紀の始め、日本の近世の俗習を超脱、古代の高雅に通達して、現代の日本でもその書と詩歌をはなはだ賞ばれてゐる良寛、その人の辞世が、自分は形に残すものはなにも持たぬし、なにも残せるとは思はぬが、自分の死後も自然はなほ美しい、これがただ自分のこの世に残す形見になってくれるだらう、といふ歌であつたのです。日本古来の心情がこもつてゐるとともに、良寛の宗教の心も聞える歌です。

いついつと待ちにし人は来りけり 今は相見てなにか思はん

このやうな愛の歌も良寛にはあつて、私の好きな歌ですが、老衰の加はつた68歳の良寛は、29歳の若い尼、貞心とめぐりあつて、うるはしい愛にめぐまれます。永遠の女性にめぐりあへたよろこびの歌とも、待ちわびた愛人が来てくれたよろこびの歌とも取れます。「今は相見てなにか思はん」が素直に満ちてゐます。

良寛は74歳で死にました。私の小説の『雪国』と同じ雪国の越後、つまり、シベリアから日本海を渡つて来る寒風に真向ひの、裏日本の北国、今の新潟県に生まれて、生涯をその雪国に過ごしたのでしたが、老い衰へて、死の近いのを知つた、そして心がさとり澄み渡つてゐた、この詩僧の「末期の眼」には、辞世にある、雪国の自然がなほ美しく映つたであらうと思ひます。

ノーベル文学賞記念講演という晴れの舞台で、雪国越後の良寛は、日本の心と美の体得者として、現代日本の最大の作家によって、こんなに詳しく世界に紹介されたのである。講演の英訳は、「雪国」「千羽鶴」の訳者、ミシガン大学教授 Edward G. Seidensticker 氏によってなされた。いわゆる良寛辞世の歌は次のように訳されている。

"What shall be my legacy?

The blossoms of spring,

The cuckoo in the hills,

the leaves of autumn."

「かたみとて何かのこさむ……」の歌を、川端康成は終始良寛辞世の歌として紹介した。良寛研究に生涯をささげた相馬御風も、その著「大愚良寛」（大正7年）に、良寛の晩年と死について語り、最後の病床に日夜看護の誠をつくした貞心尼に示したという

裏を見せおもてを見せて散るもみぢ

の句をあげて、「かくて彼のたましひは、今やまったく自然そのもののたましひであった。自然と彼とは一如であった」とのべ、さらに「かたみとて何かのこさむ……」の歌をあげて、「要するに之れが彼の最後の言葉であった」と記している。最後の言葉というのはいわゆる辞世という意味である。

同じ著者の「良寛百考」（昭和10年）にも「良寛の辞世」と題する小文がおさめられている。ここでもこの歌を良寛和尚が弟子達にのこす片身の歌として詠んだという伝承を肯定して

これは正しく自然と自我との一如境である。そしてこの歌は私にその意味に於て最も深い印象を 与へてゐる 道元禪師の「傘松道詠集」中の左の一首をおもひ 合はさせる。

春は花夏ほととぎす秋は月 冬雪さえて冷しかりけり

良寛はいふまでもなく、彼の最も尊崇してゐた宗祖道元のこの歌を知ってもゐたであらうし、又常に愛誦措かなかつたであらう。そしてその影響がつひにかの辞世の一首の上に一層光輝ある表現を示したのであらう。

道元の歌は自然のあらゆる表相をありがたく楽しく享け入れ味って行かうとする心の現れである。まことに廓然たる心境である。そして良寛の歌に至っては、更に一步を進めて自我との絶対一如境に外ならぬ

と記している。これを読むと、川端康成の講演も、良寛に関するかぎり、昭和10年頃の相馬御風とどれほどの相違もないように思われる。

芭蕉は毎日吐きすてる句はことごとく我が辞世と云つたというのが、充実した人生を生き

た達人の心境からすれば、一代の文人の覚悟はまさにそうであつたろうと思われる。そのような意味では、良寛の詩も歌も、すべて辞世でないものはないかも知れぬ。まして「かたみとて……」の歌は、内容から見ても辞世として立派に通用するから、ことさらに異議をさしはさむ必要はないかも知れない。良寛末期の心境にかわりはないとしても、講演中、くりかえしてああはっきりと辞世の歌と云われるとやはり少々気にかかるのである。実はこの歌は、普通のいわゆる辞世、デスベッドの作ではなかった。

こんなことは、今更とりあげるまでもない。当の相馬御風が、既に早く気づいて訂正しているのである。それは「良寛を語る」（昭和16年）所収『良寛の辞世歌』という一文においてである。

良寛の実弟山本由之の「八重菊日記」と題する手記を読むと、その歌に就いてこんな風書いてある。

おはせし世に、よせ子（与板山田氏）が御形見こひし歌の御かへし

かたみとて何をおくらむ春は花 夏ほととぎす秋のもみぢば

此短冊をかけぢの上におして、下には其をとぶらふとててづから 御姿をものして、箱に書付せよといひければ、蓋のうらに

春は花秋の紅葉のことの葉ぞ 散りにし後のかたみ成ける

これによると、かの「かたみとて……」の歌は最初与板の山田よせ子の求めによって短冊に書き与へたもので、決して死に臨んで辞世としてなど詠んだ歌でなかったことが明らかである。

御風はさらにつづけて、その短冊と山田よせ子を書いたという良寛像の所在が現在不明であることを惜しみ、また別に

かたみとてなにのこすらむ春ははな 夏ほととぎす秋はもみぢば

という良寛筆の懐紙の所蔵者のあることを報告している。由之の八重菊日記によって明らかなように、川端康成が良寛末期の歌として、「辞世です」と特に念をおした歌は、歌詞に多少の異同はあるが、与板の山田よせ子に形見を乞われての返歌なのである。「決して死に臨んで辞世としてなど詠んだ歌でなかった」。

もっとも、このよせ子は良寛の死後、良寛遺愛の杖を形見としてもらっている。

良寛禅師の御杖とて、木村大人のわれに賜ひけるをつきつつ帰るさの道に

て

法の師の片みの杖の力にて われとはなしにかへるうれしさ

木村大人とは、もとより良寛がその最晩年を過した島崎村木村家の当主元右衛門、この人の好意によって、よせ子の切なる願いはかなえられたわけである。よせ子の歌には、悲しみの中にも、なお法の師の御杖にすぐることのできる深いよろこびが、すなおにうたわれている。

春は花、山ほととぎす、秋はもみぢ葉——春夏秋冬、うつり変る美しい越後の山川草木、自然はさながらに良寛の形見であって、それ以外何一つ良寛は死後に残す必要は認めなかったであろうが、世俗の風習に従って、形見分けはいろいろの形で行われたのであろう。しかしそれは良寛のあずかり知るところではなかった。

禅師のかたみに衣をたまはりて

わが袖にもるる涙をかけよとて かたみに残すからころもかな

という歌もある。作者は出雲崎の浄玄寺に嫁した、良寛の末妹妙現尼である。良寛遺愛の品々が形見として、親類縁者に分けられたことは、これらの歌で知られるが、良寛に「形見とて何か残さむ……」の歌あってか、今も国上を訪れる人は

いざ子供山べに行かん桜見に 明日ともいはば散りもこそせめ

あしびきの国上の山の時鳥 よそに聞くよりあはれなりけり

わが宿をたづねて来ませあしびきの 山のもみぢを手折りがてらに

飯乞ふと里にも出でずなりにけり 昨日も今日も雪の降れば

などの歌を、あわれ深く想いおこさずにはいられないのである。

さればと云って良寛に、いわゆる形見という意識が無かったわけではない。春の歌に

梅が香を布の衣につつまては 春はすぐとも形見ならなん

など、ごく軽い意味の形見であるが、次の三首はまさしく死後の形見である。

煙だに天つみ空に消えはてて 面かげのみぞ形見ならまし

何ごととも皆昔とぞなりにける 涙ばかりや形見ならまし

古のますらたけをの形見ぞと 見つつしのばん年はふるとも

これらはすべて、知友の子を失えるを悼み、故旧の死去をきいて追悼の涙をそそぎ、遺品に古佛をしのぶ心をのべている。

そればかりではない。何よりも著しいのは良寛が意識的にのこした形見が現存している。それは、国上寺に今も寺宝として伝わる源氏物語湖月抄である。文化13年、59歳の良寛は年久しく住みなれた五合庵をすてて、国上山麓乙子社前の草庵に移った。顔齡ようやく五合庵への険しい山路の上下はたえ難いものとなったからであろう。五合庵をひき払うにあたって、良寛はその愛読書湖月抄を、長きに渡った山住みの記念として、国上寺に奉納したのである。筆者は幾度か国上寺に参詣、住職山田鏡阿師に乞うて、寺宝の閲覧を許されたが、湖月抄の表紙裏には、一冊一冊実に丹念な文字で

残しておくこのふるふみは末長く 我がなきあとのかたみともがな
と書き留められている。本文には随所に不審紙が貼り付けてあり、この本の持主が、いかに源氏物語を精読したかを示している。この湖月抄を前にして、寂漠たる五合庵の寒夜、ほの暗いともし火のもと、六十路に近い良寛が、源氏物語に読みふけた姿を脳裏に描き、深い感動にうたれたことを、今も昨日のごとく想起するのである。良寛の詩歌の底に流れる、限りもなく広く、ゆたかな、あたたかい人間性は、もとより生得のものであろうが、更に万葉集、古今集をはじめ、源氏物語のような日本の古典の味読によって培われていることを見のがすことはできないと思う。

昭和44年(1969)、——川端康成が良寛をストックホルムで紹介したその翌年、良寛の書がはじめて欧州に渡った。スイスのチューリッヒ及び西独のケルンを会場として行なわれた日本古美術ヨーロッパ巡回展で、特に西欧からのもとめにより、良寛遺墨が追加出品されたのである。

頭髪蓬々耳卓朔
納衣半破若雲烟
日暮城頭帰来道
兒童相擁西又東

越州沙門良寛書

この一幅は奔放無碍な、いわゆるグラスライティングで、当時の新聞報道では、特に評判がよく、紅毛碧眼の異邦人を驚嘆させたという。近刊の加藤倍一氏著「良寛の書」第二巻の解説によれば、それは良寛の代表作とも云うべき傑作であり、墨の美しさ、線の流れの美しさ、格調の高さに特徴があり、「寸分の妥協も許さないきびしい面があらわれ」ていて、「そばへ寄ったらはじきかえされてしまいそうな嵩高な作品である」とまで絶讃されている。

筆者もこの書はしばしば遺墨展でお目にかかっているが、昨年四月、所蔵者解良順治氏のお宅で、いわゆる鍋蓋の「心月輪」と、この一幅の拝見を許され、ヨーロッパ帰りの良寛さんに親しく対面する喜びにひたった。

書道の門外漢である筆者など、原詩を知っていればこそ、わずかにたどることができるに過ぎない筆の跡が、現代の異邦人の注目を集めたというのは、何といても良寛書芸の力であろう。この作品の前に足をとどめる人が多かったというのも、単に全く異質の文化、異質の芸術に対する好奇心からばかりではなかったと思われる。

良寛の芸術は、今や北国越後の好事家の手をはなれ、日本の、そして世界の良寛としてその真価を発揮することとなったのである。

良寛の名が次第に国際的になろうとしている時、筆者はかつて同僚であった一人のドイツ人の名を思い出さずにはいられない。その名はヤコブ・フィッセル (Jakob Fischer), 昭和7年から終戦まで新潟高等学校の傭外国人教師として、多年ドイツ語教育に力をつくした人である。

Fischer 氏には、今を去ること37年前、昭和12年 (1937) に、“Dew-drops on a Lotus Leaf” と題する英文良寛伝の著述がある。恐らく、これは良寛が欧文で紹介された最も早い文献であろう。本書は菊判本文 152 ページの小冊子であるが、良寛の逸話、書簡、詩歌を随所に引用しつつ、その生涯の行実と思想と芸術とを、詩情ゆたかに語ったものである。その内容は

- I The Child
- II Dreams
- III Refuge
- IV Dawn
- V Storm Voices
- VI Light through the Mist
- VII The Stream of Life
- VIII The Clearer Self
- IX Peace and Harmony
- X Passing Moods
- XI Crimson Leaves

の11章に分ち、少年時代に筆を起こして、出家、修業、巡歴、帰郷、五合庵山居、数々の逸話、悟の境涯、心身和調、詩歌、終焉に及んでいる。

行文も平易で、よくこの人の全生涯を浮き彫りにしている。何分、37年前の著述であり、その資料の多くは相馬御風の研究に負っているらしく、その後の研究によって改めらるべき点も散見するが、全篇を貫くものは、著者の良寛に対する異常な傾倒と熱意であり、それらの瑕瑾をつぐなってお余りがある。むしろ、異邦人として、この特異の人格によくここまで迫り得たものと賞讃すべきである。

序言によれば、著者は新潟に移り住んで後、しばしばこの興味ある人物について耳にするところがあったが、ある冬の一夜、当時新潟医科大学教授であった平沢興氏（後の京都大学学長）から、良寛の数々の逸話や書や詩歌についての話を聞いて、異常な興味を感じ、爾来二年半にわたる研鑽を経て、English reader に対して、この種のものとして最初の小著を編むにいたった由である。良寛に関する西欧の文献は皆無であり、日本の文献のみによる資料の蒐集は、決して容易な仕事ではなかった。幸いに彼はよき援助者に恵まれた。序文の終りに、特に名をあげて、謝意を表しているのは、佐内巖、酒井千尋の両教授、安田鞠彦、津田青楓の両画伯、相馬御風、西蒲原郡燕小学校長 原田勘平、宣教師 Watts 氏夫妻、新潟高等学校長岡田恒輔、独乙語主任教授朝日方圓の諸氏である。Watts 氏夫妻戦後の消息は知るよしもないが、両画伯をのぞき、他はことごとく今は故人であ

る。

本書の巻頭は、相馬御風と元侍医頭入沢達吉の好意に満ちた序文で飾られている。御風は云う。

“Ryokwan of Echigo Province very rapidly became Ryokwan of Japan. And now, thanks to Mr. Fischer's work, he is becoming Ryokwan of the World. This is a supreme joy to me, for I have been devoting all my time and energy to Ryokwan for more than twenty years.”

“I do not doubt that this book of Mr. Fischer's will bring pleasure to many thoughtful persons who understand the English language.”

入沢博士の序文には次のような讃辞と希望が述べられている。

“Mr. Jakob Fischer, a professor of the Kotogakko in Niigata, has now written a biography of Ryokwan in English. This will be the first book on Ryokwan written by a foreigner.

In Japan, Ryokwan occupies a unique place, where the story of his life has met with an eager and sympathetic response. I feel sure that when his biography is brought before the western world the same enthusiastic interest will be forthcoming. It was indeed a wise thought of Mr. Fischer's to plan to extend to the West the appreciation of this beloved Japanese priest and Poet.

I earnestly hope that the book will be widely read among Western people.”

著者は越後の詩僧良寛に不思議な魅力を感じ、良寛の人と芸術とに、日本の、東洋の精神の最高の化身を感得して、その研究と鑑賞に没頭した。そしてその成果を西欧の読者に訴えようと企てたのである。著者は云う。

“Ryokwan is indeed a figure worthy of being known, and I feel sure that he can not fail to find an appeal in the hearts of Western readers.

May this little book be warmly received by all who open its pages!"

"At the present time, Ryokwan's radiance is spreading throughout Japan and the influence of his high character is making its impress day by day upon the Japanese people. May his spirit be received and appreciated in other parts of the world as well."

戦後は西欧の各国に、日本文学の翻訳紹介されるものも多く、ノーベル文学賞受賞作家も出るまでになったが、今から37年前といえば、丁度支那事変のはじまった年である。果してどれだけ西欧の読者に、この書が享け入れられたであろうか。「越後の良寛は急速に日本の良寛となり、今や Fischer 氏の近業によって世界の良寛となろうとしている」(序文)と御風は云っている。それは川端康成の受賞講演に先立つこと、31年の昔であった。

今にして思えば、筆者が氏の同僚の一員となった昭和10年は、丁度 Fischer 氏が良寛研究に足を踏み入れたばかりの頃であった。英語担当の佐内教授がめずらしく茅屋に見えて、良寛の長歌「月の兎」を現代語に訳してほしいとの依頼を受けた。昭和11年1月のことである。不思議なこともあるものと思いながら拙訳を奉った。仏教に暗い筆者は、仏教大辞典などをたよりに、誤りなきを期した記憶がある。あとで聞くと、それをもとに佐内教授が Fischer 氏に英語で解説され、Fischer 氏が英文に綴りあげたのだそうである。そうして出来あがった原稿は、更にカナダから新潟に来て布教活動に従事していた Watts 氏夫妻の校閲を経て完成を見たのである。今あらためて本書第7章に収められている“The Rabbit in the Moon”を読みかえしてみても、古い記憶がよみがえり、わずか2ページにすぎぬこの小文を草するにも、それに払った若いドイツ人の周到な用意と苦心のほどがしのばれるのである。筆者の当時の経験によって、わずかに知り得るこの事実は、おしてもって全ページに及ぼすことができるであろう。

Fischer 氏は良寛遺墨数点を所蔵していた。“Now-a-days, of course, Ryokwan's writings cost a great deal of money. One small poem is sold for at least two or three hundred yen and sometimes more.”と著者自身記している。小点一幅を求めるにも、当時彼の一ヶ月の俸給を全部投入しなければならなかったであろう。良

寛の書を熱心にさがしているドイツ人があると聞いて、いかがわしい膺物を持ちこむ骨董商もあって、その鑑定には、日本の古美術に詳しい酒井千尋教授（後、畠山美術館長）がよきアドバイザーであった。

化学の坂部重寿教授は、鳴鶴門に学び、書家としても名をはせていたが、良寛の書については、常にこの教授の教を乞うた。教官控室の一隅で、坂部教授の解説を丹念にノートしている Fischer 氏の姿を見かけたのも一再ではなかった。これも昭和11年の夏の頃であった。Fischer 氏が、良寛を日本最高の書家と認めてよいかと質問すると、坂部教授は良寛を一級の書家の一人とするに吝かではないが、最高とは云いがたい、最高の書家は大師様（空海）だと言うと答えられた。

著者の周囲にはこのようなすぐれた援助者が多かった。当時の校長岡田恒輔先生は、「悲哀の感情」という著書もある心理学者で、新潟の後、七高・浦和の高等学校長を歴任された高名な教育者である。剣道は師範格、油絵のたしなみも深く、和歌も作るという多趣味な高士であったから、著者の良寛研究には深い理解を示された。昭和10年、文部省視学委員として高楠順次郎・藤村作の二教授が来校の折、校長は自ら案内に立って国上寺、五合庵に良寛の遺跡をとぶらい

良寛が書きなぐりたる屏風の字 読み煩える博士どもかな

という即興の歌を、小紙片にしたためて筆者に示し、恩師藤村先生の側で、いささか固くなっている筆者の肩のこりをほぐして下さったことなども、今は懐しい思い出である。

Fischer 氏はその統率の下にあった独乙語主任教授朝日方圓教授は僧籍の出身であり、Fischer 氏の研究に側面からの援助を惜しまれなかった。人に求められるたびに「自然法爾」と染筆されるのが常であったが、良寛精神のよき理解者であることを示すものであろう。

岩波文庫「良寛詩集」の編者原田勘平翁も最近物故されたが、著者はしばしば氏を訪れて教を乞うた。昭和10年、著者は相馬御風を糸魚川に訪れ、暫く滞在して良寛について語り合った。御風はその楽しかった日々の思い出は今も胸中を徂徠するといい、「Fischer 氏の良寛理解は異常に深く、それは自分にとって稀有のよろこびをもたらした」（序文）という。また、

殊に良寛さまの書については、彼はその線のリズミカルな変化や、墨の濃淡の配置

交錯や、紙面の空間の活かし方などに大いに興味を感じてみた。良寛さまの書いた字の読めない点では日本人の間にもフィッシャー氏同様の人も少くないが、そのピクチュアレスな妙味を敏感につかみ得てゐる点ではフィッシャー氏に及ばない日本人も少くないであらう。とにかくそれ位の程度まで彼は良寛さまの書の妙味をさへも理解することが出来た（「良寛を語る」所収「ヤコフ・フィッシャー氏著英文良寛さまに就て」）とも記している。良寛について造詣の深い 靱彦・青楓の両画伯も著者にはよき先達であり、親切的な指導者であった。

このような恵まれた環境のもとで、刻苦二年半、“Dew-drops on a Lotus Leaf”は誕生した。

Fischer氏は第一次大戦の苦い経験から、第二次大戦がはじまると、構内の外人官舎を去って近郊青山に移り住み、馬鈴薯を栽培し、山羊を飼育して自給体制に入った。戦局の進展とともに、都市の被爆と食料難の必至を予測してのことであった。

終戦後は進駐軍の依頼により、各キャンプ地を巡回して、日本の古美術について講演した。後上京して霞ヶ関に、レストラン・ラインランドを経営して生計をたて、かたわら東京大学の聴講生となって仏教及び美術史の研究を続けた。筆者は見る機会を逸したが、映画「真空地帯」に出演してタレント振りを発揮したり、東京在住外国人囲碁トーナメントに出場して優勝、外人本因坊位を獲得したことなどもあった。その後西独 Rhein-Landの故郷に帰り、たまたま入手した Bollendorfの古城に手を加え、在日中に蒐集した古美術品を陳列して日本美術館と名付け、昭和39年6月29日に開館した。資料補充のためその後も数回来日している。新潟市の市民文化講演会では次のように語った。

「この美術館は日に日に見える人が増えてきました。10人のうち7人までがベルギー、オランダ、フランス、イギリスなどから来る外国人です。人々は遠い日本の古い文化に大変驚き、興味を持ちいろいろな質問をします。その質問から、ヨーロッパの人々には高貴な文化と伝統の中の日本人の生活がほとんど知られていないことがわかりました。始めは好奇心で見にきた人のなかにも、美術館の内情を知るに従って、真面目に日本の文化を研究しようという人もでてきます。私はそういう人々のために、自分の研究書を見せて、日本の歴史や文化の説明をしますが、それが私にとって一ばん大きな喜びの時間です」（昭和44年6月4日新潟市市民文化講演会）

氏の年齢はもう70代の半ばに達しているかと思う。花子夫人は新潟県村松町の出身で、草根木皮の漢法薬を日本からとりよせ、これを近隣の人々に分って好評を得ているという。いわば近代医学の本場で、漢法薬が喜ばれているというのも、ほほえましいニュースとして聞いた。

先年、多年海外における日本文化の紹介につとめた功績によって、日本国政府はFischer氏に勲三等瑞宝章を贈った。独力日本美術館の経営もさることながら、若き日の著述「蓮の露」が大きく物を云ったのではないかと思う。

“Dew-drop on a Lotus Leaf”は昭和25年に第2版が出、海外の日本研究家や仏教研究家の間で、反響を呼び、昭和44年までに4版を重ねている。Fischer氏も、著作年次を考えれば当然のことながら、「かたみとて……」の歌を辞世としてとり扱っている。

Ryokwan before parting this world, wrote the following poem:

“When I depart heither,
I leave no memorial behind me.
But when spring passes,
The tender flowers will put forth their blooms.
In summer's gathering glow,
The cuckoos will utter their echoing call.
With the autumn's pipe of wind,
The maple leaves will don their crimson gowns.
These will speak of me...
The budding flowers, the singing cuckoos,
The flaming maples,
These.....
Reflect my soul.”

II 良寛の病気

良寛は天保2年(1831)正月六日、島崎村木村元右衛門邸の仮寓で示寂した。行年74

歳、前年の夏頃から不快がつづき、はげしい痼病がついに彼の生命を奪った。貞心尼は良寛終焉の模様を次のように記している。

あきはかならずおのが庵りをとふべしとちぎり給ひしがここちれいならねばしばし
ためらひてなど御せうそこ給はりける中に

あきはぎのはなのさかりはすぎにけり ちぎりしこともまだとげなくに

そののちはとかく御こちさはやぎ給はず冬になりてはただ御庵りにのみこもらせ
給ひて人にたいめもむづかしとてうちより戸さしかためてものし給へるよし人の語
りければせうそ奉るとて

そのままになほたへしのべいまさらに しばしのゆめをいとふなよきみ

と申つかはしければ其後給はりけること葉はなくて

あづさゆみはるになりなばくさのいほを とくでて来ませあひたきものを

かくてしはすのすゑつかたに俄におもらせ給ふよし人のもとよりしらせたりければ
打おどろきていそぎまうで見奉るにさのみなやましき御けしきにもあらず床のうへ
に座しあたまへるがおのが参りしをうれしとやおもほしけむ

いついつとまちにしひとはきたりけり いまはあひ見てなにかおもはむ

むさし野のくさはのつゆのなからひて なからひはつるみにしあらねは

かかれはひるよる御かたはらに有て御ありさま見奉りぬるにたた日にそへてよはり
によはりゆき給ひぬれはいかにせんとてもなくても遠からすかくれさせ給ふらめと
思ふにいとかなしくて

いきしにのさかひはなれてすむみにも さらぬわかれのあるぞかなしき

御かへし

うらを見せおもてを見せてちるもみぢ

こは御みづからのにはあらねど時にとりあひのたまふいといとたふとし（はちすの
露）

萩の花の咲く頃、貞心の庵を訪ねようとかかねての約束も、良寛の健康がこれを許さな
かった。冬になっては病勢もつり、人に会うのも煩わしく、中から鍵をかけての籠居で
ある。良寛はひたすら春を待った。雪が消えて春にさえなれば、貞心尼が訪れてくれるで
あろう。しかし12月の末、病状はにわかに悪化し、急報によって駆けつけた貞心を待ち受

けた良寛は、床の上に座して、さのみなやましげな気色でもなかったという。貞心に与えた二首の歌には臨終のせまった人とは思われぬほどの大歓喜と大安神の境地がうかがえる。愛弟貞心の心からなるみとりを受けて、良寛の死は、よろこびにみちた静かな死であった。「はちすの露」は痢病については全くふれていない。

良寛の弟由之の日記によると、死期の迫った12月25日は大雪であった。良寛の痢病は一進一退の長煩いで、今は頼み少しと聞いて、与板から島崎までは2里、塩入峠の雪を凌いでかけつけてみると、良寛は非常によろこんで、よりによってどうしてこんな大雪の日に来たのかと聞いた。由之が

さす竹の君を思ふと海人のつむ 塩ねり坂の雪ふみて来つ

という歌を示すと、良寛は次のように返歌した。

心なきものにもあるか白雪は 君が来る日にふるべきものか

死を十日後にひかえた良寛は、我身の病苦を肉親に訴える代りに、雪踏み分けて塩入峠の難所を越えて来た老弟の苦労を想いやっているのである。由之はこの時「書きあつめ給へるものの御ゆかのもとにありしをうつせし」として、数首の歌を書き留めている。「これらは苦しみにたへず、書き了ふせたまはずと見えし」とあるように、中には語調もとのわず、未定稿と思われるものも見受けられる。痢病の苦痛を詠じた次の三首は、いたいたしいまでである。

ぬば玉の夜はすがらにくそまりあかし あからひく屋はかはやに走りあへなく
に

このよらの いつか明けなむ このよらの 明けはなれなば をみな来て
はりを洗はむ こひまるび あかしかねけり ながきこの夜を

ことに出でていへばやすけりくだり腹 まことその身はいやたへがたし

寒夜独居の老良寛は、はげしい痢病に悩みつづ、翰墨をもってわずかにその苦痛をまぎらしていたかに見える。「是翁以前無此翁 是翁以後無此翁」と彼は元禄の芭蕉をたたえているが此翁も同しく痢病で亡くなっている。乙子社前の草庵時代の詩に、「六十有余多病僧」と云っているからよく病気をしたのであろう。「贈鈴木隆造」の詩には、「九夏三

伏日 吐瀉四支萎 如夢復似幻 三日絶飲食」とあって、はげしい吐き下しで絶食三日、生きた心地もなかったのに、栗生津村の鈴木桐軒から良薬をもらって快癒した趣がのべられている。

昨夜丑時時分丸薬を服候夜中四たびうらへ参り候初はしづりて少々くだり二三度ハ
さささとくだり四度目ハ又少々くだり候腹いたみ口の中辛く且つ酔く候今朝はみなよ
ろしくなり候（8月16日宗庵老宛書簡）

これは詳細な病状報告、医師宗庵にとって良寛は模範的な患者であった。

良寛は74歳で没した。当時としては長命というべきであろう。自ら多病の僧と称しているが、国上山中五合庵の生活に代表されるような簡素無類の生活に耐えて、74年の長寿を保ったのは、禅僧としてのきびしい修業が、自らその素地を鍛えあげていたのであろうか。

良寛の書簡の今に伝わるものは概数二百二、三十通（宮栄二氏調査）であるという。書簡は実用を旨とするために、特別の配慮が加えられ、読みやすい書体で書かれていて、写真版による図録「良寛の書簡」（BSN新潟放送）は、世の良寛ファンにとって有難い出版であった。長谷川敏朗氏編「良寛書簡集」（野島出版）には247通の書簡が集められていて、解説は懇切を極めている。これらを通読すると、良寛その人の人間性がじかに伝わって来てつきせぬ興味をおぼえるのであるが、病気に関する記事の多いのにも驚かされる。書簡の多くは五合庵定住以後のものと思われるが、以下良寛が苦しんだ病気を順序もなく拾ってみようと思う。

【ひぜん】手の指の間などにできる皮膚病で、弟の由之宛に「ひぜんも今は有るかなきかになり候」とある。これをなおすには、湯花とくるみをすり鉢に入れてよくすり交ぜ、しょうがの絞り汁で手にぬりつけ、その乾くのを待って荊角子（さいかちいばらのとき）の煎じ湯で洗うと効能のあることを医者から教わっている。妹おむろの婚家、地藏堂の中村氏に、製法、使用法、効能を詳しくしたためて、この薬を進上している。

【いんきん・たむし】「いんきんたむし再発致し候間万能功一貝（貝の形図示）御恵投度被下候」（富取北仙宛）によればこの頑癬に悩まされたのも一再でなかった。

【やけど・きず】 囲炉裏に柴折りくべる自炊生活では火傷も時々したのであろう。「やけどの薬の製法を御しるし被下可候」（甥の橋馬之助宛） 険しい国上の山路では、つまづくことも多く、傷薬も必要であったと見えて、「先日きず薬をたまはり候 文をわたす人の粗相にてやうやく昨日受けとり候」という手紙がある。

【はれもの】 これは69歳、木村家に移ってからのことであるが、弟由之から木村元衛門宛に「禅師の腫は如何に 御座候や不安心に候 ついでに 御様子御きかせ 下され度」とある。

【足のいたみ】 「此間はつつきて寒に罷成候如何御くらし被遊候や 先日は御世話にあつかり大慶に奉存候 野僧足もさつはいいへ候」（22日阿部みき衛門老宛）

いまふつかみかもちなばさすたけの きみがみあしもよくなほらまし（定珍）

くすりしのいふもきかずにかへらくの みちはいはみちあしのいたまむ（定珍）

ぬばたまのこよひもここにやどからむ きみがみことのいなみがたさに（良寛）

阿部みき衛門は定珍の通称。

【眼病】 「目ぐすり入の壺の蓋によろしく（図示）これくらゐの形を見だしたまはり給へ」（由之宛）とあって、簡素な生活を好んだ良寛の面目が躍如としている。さざえの蓋はいろいろ用途があって、塩入の蓋にするから二つ三つほしい、なるべく大きいのがよいという手紙もある。

「先日は眼病のりやうじがてら与板へ参りその上足たゆく腸いたみ御草庵もとぶらはずなり寺泊の方へ行かむとおもひ地藏堂中村氏に宿りいまにふせりまだ寺泊へもゆかず候ちぎりにたがひ候事大目に御らうじたまはるべく候

秋萩の花のさかりもすぎにけり 契りしこともまたとげなくに」（8月18日貞心尼宛）

眼病の治療には島崎から与板まで行かねばならなかった。秋八月、痢病はもうこの頃から兆していたのである。足たゆく、腸いたみ長岡郊外福島にある貞心尼の草庵訪問の約も果たせず、寺泊へ行こうとして 途中地藏堂で臥床、秋萩の花の盛日も空しく過ぎて行った。

【せんき】 疝気は大・小腸など下腹部内臓や腰のいたむ病気の総称である。「野僧此比は寒気にてせんき起候処かせゆいも夜々焼てたべ快気仕候」（臘月廿六日解良叔問宛）

国上山麓牧が花の大庄屋解良叔間から、煙草・みそ豆その他歳暮の贈物がとどき、その礼状の中の一節である。里では迎春の用意に忙しい歳末、寒気がこたえて疝氣を病み、毎晩焼芋で腹を暖ためて痛みを消していたのである。

うずみ火に足さしくべて臥せれども こよひの寒さ腹にとほりぬ

やれきぬをありのことごときてはぬれども やまもとのをささふくやはさむくこそあれ

疝氣にきくかせゆいもは、何首烏芋で「塊根とむかごを食用にするため栽培される。ヤマノイモ科の多年生蔓草である。」（長谷川敏朗氏）

【痰】 赤塚の医師中原元譲宛に、痰の葉の礼状があるところを見れば、冬の間は呼吸器にも支障があったのであろう。「暖気の節如何御暮被遊候や野僧も此程は漸快気仕候先比は私るすに痰の葉宇治の茶相とどき候此度ハ酒なむばんづけ恭受納仕候」それにしても、痰の葉を処方して送ったすぐその後で、百薬の長を送りとどけるとは、中原元譲なかなか心にくい医者殿ではある。

【食欲不振】 「あまり食事不進候間梅干御たくはひ御座候はば少々たまはり度候」（10月10日阿部定珍宛）病中とはかく食欲も出ない。こんな時に梅干でもと思うが、その貯えもなかったのである。「一兩日は食事すすみ候口中うるおひを生候」と甥の橋左門に書き送ったのは天保元年霜月27日、死に先立つこと40日である。

【風邪】 良寛は風邪ひきの名人である。病状を知らせたものでは、風邪に関するものが一番多い。

「さて私も 此風にて 大ニいたみ 此世のものとハおぼへず 候しが三兩日ハ少々快気仕候（12月29日阿部定珍宛）」

「私も 旧冬より 風ひきいまにとどこもり候しかし 此間は 漸快気致候御安事被下まぢく候」（正月九日解良叔間宛）

「先日草庵へ御来臨の翌日より又風をひきかへし候一兩日以来人心に罷成候」（2月11日解良叔間宛）

「久く風邪に而ふせりよふよふ近日よく候得共于今すきとハいたさず候」（7月10日解良叔間宛）

「野僧出雲崎まで参候得共小々風氣にて未帰庵不仕候」（4月28日山田杜皐宛）

日付を見れば、春夏秋冬いつも風邪をひいていることが分る。その他「寒気まけにて不快」とか、「寒気にまけ心もちあしく」など、冬の寒さは老年になるに及んでいよいよ堪えがたい趣が読みとられる。

【老病】「九日の朝の御齋参上仕度候ししながら独身の事ニ候間いかようの事有之候而違ひ候とも人を以御知せ申候事もいたしかね候且老病の身の上に候得ば御推察可被下候明日は人にやくそく致候事御座候間参上致兼候」（8月朔日阿部定珍宛）

「此間暑気甚候如何御暮被遊候や野僧無事に打過候然ば近き中に御経読誦ながらこなたの草庵へ御出の由承候僧も老衰いたし万事にものうく候此事は御とどめ被遊て然べく候以上」（6月9日つるがや御隠居宛）

上のごとく、自ら「老病の身の上」故に、何時いかなることが起るやも知れず、山中の草庵独居の生活では、通報のしようもなく、約束の履行できぬ時は万事御推察いただきたいといい、又、「僧も老衰いたし万事にものうく」、暑中の御来訪は御遠慮願いたいと辞っている。なお唐紙を返そうと思つていろいろ探してみたが見当らない、「信に老もう致候」（三浦屋幸助宛）ともいっている。

おいぬればまことをぢなくなりけり われさへにこそおどろかれぬれ

としつきのさそひていなばいかばかり うれしからましその老いらくを

病中にはことさら我身の老いを痛感したのであろう。視力も衰え、目はかすみ、四六時中耳鳴になやまされる。人生の無常迅速をうたった詩の一節に「耳蟬竟夜鳴 眼華終日飛」とあるのは、必ずしも自分の肉体について云っているのではないが、なまなましい実感がこもっている。

【こしけの病】腰気は白帯下の別称で婦人病である。腰痛症は俗に「こしが起きた」など今でも云っているが、「こしけ」とは云わないようである。

「御薬ハ服用仕候へどもしるしなく候ままし用様も御座候はんと思候へば余ハつかはし候さてこしけの病ハ人の教候故キウリの根をせんじて服し候へバ平愈致候」（7月11日橘左門宛）

キウリの根の煎汁で平癒したという「こしけ」の病とはどういう病気なのであろうか。いくら多病の僧でも白帯下にまで義理をたてることはあるまい。疑問に思つて手元にある薬用植物の本にあたつて見たが、蔓からとった液や果汁は咳止め、風邪、火傷、汗疹に、

果肉の陰干にしたものは心臓病、腎臓病、淋病に効があり、葉をもんで得た汁は毛生薬になるというに止まって、残念ながら根の利用法には説き及んでいない。

「良寛書簡集」には「こしけは日葡辞典に腰氣すなわち腰のいたみをさすとある。また文中の『キウリ』は『われもこう』を昔『きうりぐさ』と呼んだ。その根は疝痛、腹痛、下痢にきくものである。良寛は直腸癌で死亡したらしいから、腰の痛みや下痢に悩まされていたものと思われる」(p. 30)とあって甚だ明快である。

ただ、日葡辞書の腰氣の説明は、簡単すぎて病気の実体が分らない。パジェス日仏辞典も Cochike は腰の虚弱又は苦痛とあるだけで、これでは脚氣を足の病気というのと同じである。腰氣はまさしく字義通り腰の病気である。筆者には、使い馴れない日葡辞書なので、腰の痛みを伴う病気を、男女ともに「こしけ」と云った証拠にしていまいかどうか、その辺の呼吸が分らない。日本国語大辞典(小学館)では、婦人病の「こしけ」の条に、日葡辞書から Coxique (コシケ) を採り、<訳>腰の病としている。どうやら腰の病一般とは認めていないようである。

また、キウリを「われもこう」の異名「きうりぐさ」としたのは新見であるが、吾亦紅は藤袴とともに代表的な秋の花で、襲ねの色目にもなっている。黄瓜(胡瓜)を圧倒して、「きうりぐさ」の略称「キウリ」で通用したかどうか甚だ疑わしい。方言の中でも、固有名詞は生命が長いから、今も与板あたりで使われているかどうか、一応調査してみたいところである。

「良寛の書簡」について本状の釈文を見ると、従来の諸本が「こしけ」と読んでいるところを単に「しけ」と読み、「文中の『しけ』は『しげ』で女性の名前かと思われるが、湿と解し病名であろうという説もある」(p. 343)と解説している。「之」の草体「し」を字体がまぎらわしいために、従来「こし」の二字に読み誤って来たとするのである。「こしけ」と読んで明快な断を下した「良寛書簡集」の編者も、「文中の『こしけ』は『しけ』とも読める」(p. 30)と最初にことわっている。

宮栄二氏は「良寛書簡の特性」(「良寛の書簡」所収)の中で、由之書簡や馬之助書簡に出て来る「しけ」を根拠として、「当時母の実家である山田家に預けられていた馬之助の女であろうか、いずれにしても『しけ』は病気の名ではなく、人名である」(p. 370)と断定している。

これで良寛も宮氏のおかげで、婦人病にだけはかからずにすんだが、キウリでなあった「しげ女」の病気が何であったかは、やはり明らかでない。

多病な良寛は、他人の病気にも人一倍同情したのであろう。ひぜんの薬をおくって、詳細にその製法や使用法を説き、三条の親しい医者が来たのを幸い、淋病の話をして薬をとりよせ、これを友人に進呈している。良寛の逸話を伝えて最も信頼性のある「良寛禅師奇話」に、「師能人ノ為メニ病ヲ看飲食起居心ヲ尽ス又能按摩シ又灸ヲスフ」とあるから、病者には親身になって看護し、按摩や灸術の心得もあったのである。

「師常ニ酒ヲ好ムシカリト云トモ量ヲ超テ酔狂ニ至ルヲ見ズ」、「又烟草ヲモ好ム初ハ其キセルタハコ入等自ラ持ツコトナシ人ノヲモチテ吸後ニ自ラ持コトアリ」（奇話）というから、酒も煙草も度を過ごすことはなかった。「人も三十四十を越へはおとろへゆくものなれば随分御養生可被遊候大酒飽淫は実に命をきる斧なりゆめゆめすごさぬよふにあそばさるべく候」と弟由之を戒めているから、良寛自身もまた平生養生に注意を怠らなかったであろう。

良寛は74年の生涯の間、かくさまざまな病気にかかった。あるいは名医をもとめ、良薬をたずねた。この点は常人と変わるところがない。ただ、索々たる五合庵の夕、寥々たる祠前僧宅の夜、終日訪う人もなく、病臥孤独の良寛はどうしてその苦しみに耐えたのであろうか。文政11年、良寛71歳の冬、三条大地震直後の書簡、「災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候死ぬる時節には死がよく候是はこれ災難をのがるる妙法にて候」（山田杜阜宛）のひそみにならえば、病気にかかる時節には病気にかかるがよく候ということであったかも知れない。そのような達人の心術には、凡愚の後学なお到底及びがたいものがあるが、痼病の苦痛を「まことその身はいやたへがたし」と病床の側に書きちらしていた良寛に、むしろ人間的な親しみを覚えるのである。